様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０２２０９

研究課題名（和文）近世末期の琉球におけることばの教育に関する基礎的研究―訓読と皇民化―

研究課題名（英文）Basic research on language education in the Ryukyus at the end of the early modern period: Kundoku and imperialization.

研究代表者
田場　裕規（TABA, yuuki）

沖縄国際大学・総合文化学部・教授

研究者番号：８０５８２１４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、「近世末期の琉球におけることばの教育に関する基礎的研究―訓読と皇民化―」と題し、『琉球板本六論衍義大意』を主な対象として、①訓読法の受容の様態、②庶民教化とことばの教育、③訓読と皇民化について論究することを目的として行った。また、琉球・沖縄におけることばの教育の歴史について、近世と近代を連続体としてとらえ、言語統制と国家主義、言語と国家、声と文化等についても補論することを目的とした。
　琉球における「①訓読法の受容の様態」は、（A）文之点の移入に関する史料・論文、（B）琉球の訓読資料に関する史料・論文、（C）琉球の仏教者に関する史料・論文から知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近世末期の琉球のことばの教育は、近世と近代の史料体系の違いから、教育研究として未開拓な分野であった。廃琉置県以降行われた「方言罰札」に関わって、言語統制という側面からの研究が多かった。本研究では、廃琉置県以前の琉球において、どのようなことばの教育が行われたのかを、いくつかの資料によって明らかにすることができた。これは、沖縄の言語教育史を検討する際、近代の文脈だけではなく、近世から近代に移行する段階も視野に入れて考究していくことの重要性を示すことになった。

研究成果の概要（英文）：This research is entitled ``Basic research on language education in the Ryukyus at the end of the early modern period - Kundoku and imperialization'', and focuses on the ``Ryukyu board book Rokuyaku Engi Daii'' (1) the acceptance of Kundoku method; The purpose of this study was to discuss 2) common people's indoctrination and language education, and 3) kundoku and imperialization. Furthermore, regarding the history of language education in the Ryukyus and Okinawa, we viewed early modern and modern times as a continuum, and also aimed to provide supplementary discussions on language control and nationalism, language and nation, voice and culture, etc.
``① The mode of reception of Kundoku method'' in the Ryukyus is based on (A) historical materials and papers on the importation of Bunnoten, (B) historical materials and papers on Ryukyuan Kundoku materials, and (C) historical materials and papers on Ryukyuan Buddhists. I was able to gain some knowledge.

研究分野：国語科教育学

キーワード：六論衍義大意　琉球語　訓読　科試　類推表記　書札礼　候文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近世琉球のことばの教育の実態は、不分明のことが多い。特に、1609 年の島津入りを契機として、進められた和文、漢文がどのように士族子弟等に受容され、ことばの教育として機能していたのかは、未解決な課題が多い。『琉球板本六諭衍義大意』（沖縄県立図書館蔵）は、東恩納寛惇が、昭和８年末、旧名護町の住人岸本松梅から譲り受けたものだが、近世末期の琉球の教育機関（村学校等）におけることばの教育の実態を知るための貴重な文献である。

本研究は、「近世末期の琉球におけることばの教育に関する基礎的研究―訓読と皇民化―」と題し、『琉球板本六諭衍義大意』を主な対象として、①訓読法の受容の様態、②庶民教化とことばの教育、③訓読と皇民化について論究することを目的として行った。また、琉球・沖縄におけることばの教育の歴史について、近世と近代を連続体としてとらえ、言語統制と国家主義、言語と国家、声と文化等についても補論することを目的とした。

沖縄の近代におけることばの教育の研究は、明治 12（1879）年の廃琉置県を契機にした歴史的研究、社会学的研究が行われてきた。特に、明治政府が琉球王国を日本近代国家に組み入れた政治過程において、言語による日本への同化教育が進められたことへの批判的研究は多くの成果を見ている。「方言札」等の実践に関わる研究は言語統制と権力との関係について精緻な研究が行われてきた。

廃琉置県は、琉球処分ともいわれ、「占領」や「併合」をキーワードにした文脈で語られることが多く、公教育の支配性や強制的な日本語化が強調されることが議論の中心にあった。そのため、廃琉置県以前の琉球王国時代の教育とのつながりの中で考察することが少なかった。特に、琉球王国時代のことばの教育の実態は不分明なことが多く、近世と近代の〈ミッシングリンク〉ということができる。

1609 年の島津入り以来、島津家の実効支配を受けていた琉球は、島津家を通じた文化交流によってヤマト化（日本化）が進められていく。その際、多くの和文化がもたらされ、言語の面では、和文や漢文を簡便に和解する訓読法等も伝わった。

島津入りの頃、尚寧の嗣子尚豊は、国質として鹿児島に赴き、三年間滞在した。薩南朱子学の学統を継いだ文之和尚（南浦）から、薫陶を受け「文之点」による訓読も身に付けたと言われる。そして帰国の時、文之和尚の高弟である泊如竹を琉球に招聘した。このことは、琉球の朱子学勃興の契機と言われる。それと同時に、ヤマト化（日本化）の原動力になった「文之点」と呼ばれる訓読法が琉球にもたらされたことを意味する。

廃琉置県は、沖縄のことばの教育を考える時、大きな事件ではあったが、琉球王国時代に島津からもたらされた、ヤマト（日本）文化に基づくことばの教育の状況も見過ごすことはできない。

近年、高橋俊三は、『琉球王国時代の初等教育―八重山における漢籍の琉球語資料』（2013 年）を著わし、竹原家文書『二十四孝』・『三字經俗解』、新本家文書『小学一之巻』の調査内容を公開した。そして調査結果に基づいて次の指摘がなされた。

「これらの資料は、八重山の初等教育の教材と深いかかわりがあり、おそらく、『二十四孝』は学校で行われた試験の答案で、『小学一之巻』は講義の聞き取り、あるいはまとめで、『三字經俗解』は教える立場の人による講義のための記録らしいことが分かった。」

と述べている。これを踏まえて、八重山における漢籍の学びは、「石垣方言ではなく、首里方言にもっとも近似しているが、首里方言そのものではなく、多分に和文、特に訓読文の影響を受けている言語」とした。

高橋の指摘は、琉球王朝時代のことばの教育の実態を、資料に即しながら明らかにした貴重な論考であり、廃琉置県以前と以後のことばの教育の実態を繋ぐ重要な指摘として注目される。

もちろん、琉球王国時代のことばの教育において、中国語（官話）は重要視されており、字音直読を訓練する科目が平等学校や村学校では行われていた。官生（琉球王国において王命により中国（明・清）の国子監に派遣された留学生）に選ばれることは名誉なことであり、琉球の人たちが学術を得るための道として重視されていた。

琉球における教育機関のはじまりは、程順則が創設した「明倫堂」（1718 年）と言われている。明倫堂では官話のほか経書の講解、詩文や表奏文などの外交文書の作成を教授していた。その後、国学や平等学校、村学校等の教育機関が設立され、専任の学官によって、小学・四書・五経等を教えていたと言われている。

しかし、前述したとおり、島津による支配下において、もたらされた漢文訓読の方法は、漢籍の読解方法として、一定の評価を得ており、教育機関では、字音直読の訓練と並行して行われていた。何よりも、訓読によって和解された漢文は、琉球語との親和性もあり、高橋が指摘した八重山の事例のように、教育実践に合致したものとして認知されていたと考えられる。

そのような教育実践の実態を知る資料として、『琉球板本六諭衍義大意』がある。『六諭衍義』の研究に先鞭をつけたのは東恩納寛惇だが、『琉球板本六諭衍義大意』は、彼が秘蔵していた資料である。琉球から大和にもたらされた『六諭衍義』は、室鳩巣が『六諭衍義大意』として和解したが、琉球にも逆輸入され『琉球板本六諭衍義大意』として発行された。東恩納は、『琉球板本六諭衍義大意』に注目していた。

『琉球板本』は、『豊川親方本六諭衍義大意』 を印刻したもので、美濃紙に八行ずつ真書、草書を併記してある。そのため、本文だけで１５２枚からなる。村学校等において使用する手習いの教本を意図していたと考えられる。また、当時流通していた漢籍の語彙、訓法等の習熟を図り、公用文書に関する基礎学習を志向していた可能性がある。江戸時代広く流布していた『六諭衍義大意』を和解した系統の本である『琉球板本』は、近世日本における文語文（とくに漢文訓読）の影響を受けながら、琉漢混淆文のような文体が確認されており、近世琉球におけることばの教育の実態を究明する一級の資料と考えられる。

周知のとおり、『六諭衍義大意』は、『教育勅語』にも影響を与えたことが知られる。所謂、《聖諭》として『六諭衍義大意』が、庶民教化の道徳教本と位置付けられるようになったことは、寺子屋や藩校の実態からもわかる。明治以降の皇民化教育の素地は、朱子学系の教書や『六諭衍義大意』等によって、すでに近世末期には形成されていた。

一方、琉球では、士族子弟が科挙試験の合格を目指して、平等学校や村学校において、初級の漢文訓読学習として『小学』・『二十四孝』が用いられていたが、『琉球板本六諭衍義大意』がどのように扱われていたのかは分からない。廃琉置県後、スムーズに皇民化教育を進めるためにも、沖縄県庁学務課が発行する『沖縄対話』が注目されてきたが、筆者は、廃琉置県以前（近世末期）の琉球のことばの教育の実態も少なからぬ影響を与えてきたと推測している。和文、漢文の学習を学びの基礎としてきた琉球のことばの教育は、近代日本の教育思想的な面との共通性を『琉球板本六諭衍義大意』等をとおして見出すことによって、沖縄の皇民化教育を後押ししてきたと推測している。

本研究の目的は、近世から近代に移り変わる近世末期の琉球におけることばの教育の実態を調査することによって、①訓読法の受容の様態、②庶民教化とことばの教育、③訓読と皇民化について、明らかにしていく。この 3 点を明らかにすることは、近世と近代の〈ミッシングリンク〉を埋めることができる。琉球・沖縄におけることばの教育の歴史を連続体としてとらえ、言語統制と国家主義、言語と国家、声と文化等の研究に資することが期待される。

『琉球板本六諭衍義大意』の訓注訳と同時に、他の『六諭衍義大意』との比較を行う。また、『琉球板本六諭衍義大意』と同時期に版行された『御教條』（蔡温）との比較を行い、琉球における庶民教化の要件を見出す。その際、訓読法の受容実態について、共通点、相違点を確かめ、いくつかの訓読について事例研究を行う。『琉球板本六諭衍義大意』には、処々に琉球語が観察され、当時の訓読において、琉球語を意識した用法が見られる。それは、庶民共通語として用いられる首里・那覇方言を用いていることから推して、士族や商人を対象にした用法と考えられる。訓読の実態を他の資料（近世末期琉球の言語資料）と重ね合わせることによって、一般化していきたい。

以上が研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

「１．研究開始当初の背景」において記した目的を一部変更し、以下の目的を設定した。尚、研究環境において、新型コロナウイルス感染症に係る行動制限があったことによって、２０２１年度から２０２２年度初めにかけて、研究出張を控えたり、研究方法を変更したりせざるを得なかった。

本研究は、当初、『琉球板本六諭衍義大意』を主な対象として、①訓読法の受容の様態、②庶民教化とことばの教育、③訓読と皇民化について論究することを目的にしていたが、研究を進めるうちに、①～③を統合した④琉球・沖縄のことばの教育の歴史について、補論する必要がでてきたため、④を追加し変更した。

３．研究の方法

「①訓読法の受容の様態」は、先行研究の精査および専門家への聞き取り調査、訓点語学会（リモート）などに参加し、基礎的調査を行った。

「②庶民教化とことばの教育」、「③訓読と皇民化」、「④琉球・沖縄のことばの教育の歴史」は、文献調査を行った。また、沖縄の言語教育史の専門家への聞き取り調査を行った。その成果について学会発表を行い、専門知見の交流を行った。

４．研究成果

2021 年度は、琉球における「①訓読法の受容の様態」の基礎的調査を行った。その結果、(A) 文之点の移入に関する史料・論文、(B) 琉球の訓読資料に関する史料・論文、(C) 琉球の仏教者に関する史料・論文から知見を得ることができた。また、琉球漢詩文の専門家や琉球史の専門家からインタビュー調査を行い、琉球における漢詩漢文に関する専門知見や、琉球の教育制度及び科試に関する専門知見を提供していただいた。

また、「②庶民教化とことばの教育」に関わって、近世琉球のことばの教育の系統を、諸資料を精査し、次の４つの系統があることを見出した。その系統を整理すると、琉球では、王府の役職（官生として中国に留学することも含む）と密接につながることばの教育が行われており、そ

の内容は職務に必須な知識と言語能力の教習を目的としていた。近世末期の琉球におけることばの教育は、職能主義が徹底されており、王府への仕官を目標にことばの教育が行われていたことを見出した。それは、王府が役人を通じて行う統治と不可分な形でことばの教育が機能していたこともあらわしている。

2022 年度は、③と④に関わって近藤健一郎氏（北海道大学）より専門的知見を提供していただいた。近世と近代の史料体系が異なる点に注目して、単純に近世と近代を連続体で捉えることの問題点について示唆をいただいた。狩俣恵一氏（沖縄国際大学名誉教授）からは、八重山の会所（俗称コウジ）の実態等について、喜舎場永珣の著作等に触れながらご教示いただいた。会所は首里・那覇の村学校に相当する。揚字（アンギジ）という書方の試験や、文段（ブンダン）とよばれる読書が中心的な学習であったこと等について知見を得た。ただし会所設立年代（１４９０年）には疑問が残った。

奄美大島の盛岡家文書に『六諭衍義大意』があったとする情報を奄美図書館から得た。『奄美民俗　第 1～5 号』（大島高等学校郷土研究クラブ 編 1960）第 5 号（昭和 39 年 3 月）「盛家蔵書目録」に「36.本佐録　六諭衍義大意（一六四頁）」とある。盛岡家文書の所有者盛岡前武二氏から聞き取り調査を行ったが、昭和 39 年の調査以降、散佚していることを確認した。琉球板本は本文だけで 152 枚であることから推して、或いは琉球板本に近い資料ではないかと思われたが現存しない。

2 名のアルバイトによって、『琉球王代文献集』内の『遺老説伝』（謄写版）のテキスト化作業を行った。昭和 12 年の文献ではあるが、③・④の考察に関連して分析の対象としている。

2023 年度は、②と③、④に関わって、第 145 回全国大学国語教育学会信州大会において、「近世琉球のことばの教育考」と題して学会発表を行った。これまでの研究成果に加えて、向象賢の「羽地仕置」に触れ、これが近世琉球のことばの教育にどのような影響を与えたかについて考察を行った。さらに玉城朝薫と組踊に触れ、「羽地仕置」以降のヤマト化が進められる中、玉城朝薫の出世過程を見たとき、朝薫の出世過程は、琉球王府の昇任システムのモデルが生成されたことに言及した。玉城朝薫の出世のスピードは異例ともいえ、近世琉球の役人の出世栄達の道筋ともいうべき理想的なモデルとして受け止められていた。「羽地仕置」による本土の文化の奨励に後押しされて、玉城朝薫の来歴は、近世琉球のことばの教育に関する到達すべき評価指標を示したと結論づけた。

また、②③④に関わる研究に付随する考察を進める中、琉球沖縄歴史学会から例会への招待があった。2023 年 8 月例会合評会において、鈴木耕太著『組踊の歴史と研究―組踊本の校合から見えるもの』を書評した。「鈴木耕太著『組踊の歴史と研究―組踊本の校合から見えるもの』を読む―人文学としての「組踊」の射程と方法―」と題して発表し、今後『琉球沖縄歴史』誌（2024 年刊行予定、第 6 号）に掲載される。

1 名のアルバイトによって、『琉球王代文献集』内の『遺老説伝』（謄写版）のテキスト化作業を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 田場裕規	４．巻 26
２．論文標題 憂鬱なることばの教育 ―『琉球板本六論衍義大意』をめぐって―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 沖縄国際大学日本語日本文学研究	６．最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田場裕規
２．発表標題 近世琉球のことばの教育考
３．学会等名 第145回全国大学国語教育学会信州大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 田場裕規
２．発表標題 鈴木耕太著『組踊の歴史と研究―組踊本の校合から見えるもの』を読む―人文学としての「組踊」の射程と方法―
３．学会等名 琉球沖縄歴史学会（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関